京都大学	博士（社会健康医学）	氏　名	大　浦　智　子
論文題目	Studies of setting care goals and understanding subjective needs in aged care facilities: care providers' and residents' view （高齢者施設におけるケア目標の設定とニーズ把握の研究：ケア提供者と入所者本人の視点）		

（論文内容の要旨）

【背景と目的】

世界各国で高齢化が進むなか、高齢者ケアの質への関心は急速に高まっている。ケアの質を高める上で対象者の視点は重要であるが関連する知見は乏しい。

本研究は次の諸点を明らかにすることを目的とする。1）施設職員による入所高齢者へのケア目標の設定とケア目標に関連する要因 2）入所高齢者の生活上の主観的ニーズの評価法 3）入所高齢者の生活上の主観的ニーズと介護職員の把握状況

【方法】

研究１　高齢者施設のケア提供者 30 名（介護職員、看護師、介護支援専門員、理学・作業療法士、医師、等）を対象に、入所高齢者へのケア目標の設定に関して半構造化面接を実施、得られたテキストデータのコード化、カテゴリ化に基づき概念を抽出。

研究２　研究１で抽出された概念に基づき質問項目を構築し、4 領域 25 項目（基本的日常生活活動[BADL]：7 項目、手段的日常生活活動[IADL]：5 項目、生活環境と生活スタイル[EL]：8 項目、情緒[EM]：5 項目）の質問紙を作成。入所高齢者（10 施設 120 名）の構造化面接による回答から、確認的因子分析と領域別のα係数を算出。18 名の高齢者に 1 週間隔で 2 回、上記質問紙を用いた構造化面接を行い、再現性をκ_w係数で評価。

研究３　研究２で高齢者と同時に収集した担当介護職員の回答から、高齢者の主観的ニーズと介護職員による把握の相違を領域別・項目別に比較。

【結果】

研究１　施設職員による高齢者のケア目標の設定に関連して、「日々のケア目標」と「長期ケア目標」が抽出された。「日々のケア目標」は、セルフケア、生活環境と嗜好、身体面、精神面の 4 カテゴリ、「長期ケア目標」は、その人らしい生活、在宅復帰、終末期の看取りの 3 カテゴリで構成されていた。ケア目標の設定に関連して「高齢者と仕事に対する職員の意識」、「施設と職員間の人間関係」、「職員と家族との関係」、さらに「高齢者ケアにおける職員の葛藤と問題提起」が抽出された。

研究２　モデル適合度は、χ^2/df=1.090、RMSEA=0.03、パス係数 0.28-0.87、α係数は 0.79-0.85、κ_w係数は 25 項目中 14 項目で 0.60 以上であり、4 領域 25 項目モデルが概ね妥当性、内的整合性、再現性を持つことが示された。

研究３　入所高齢者・介護職員 115 ペアの分析では、高齢者ニーズ（括弧内：中央値）は IADL (66%)と EL (69%)で、BADL (83%)と EM (91%) より低かった。介護職員による高齢者ニーズの把握は、IADL (55%) と EL (60%) が、BADL (87%)と EM (87%) より低かった。介護職員の半分以下しか高齢者のニーズを把握できていなかった項目は、IADL 領域の家事活動(30%)と金銭管理(43%)、EL 領域の役割活動 (41%)であった。

【考察・結論】

施設職員が設定する高齢者のケア目標には、各高齢者の特性に応じた長期的な目標と日々の短期的な目標、さらに職員自身の仕事に対する意識や職員間の人間関係、家族との関係が関連していた。入所高齢者のニーズは基本的日常生活活動、手段的日常生活活動、生活環境と生活スタイル、情緒の 4 領域の視点が必要だが、高齢者個人の価値観に影響される領域（手段的日常生活活動や生活環境と生活スタイル）のニーズは介護職員に十分把握されていない傾向が見られた。入所高齢者の感じる生活上のニーズを施設職員がより正確に把握できれば、提供すべきケアに関してより適切な短期的・長期的目標設定が可能となる。

入所高齢者と施設職員および職員間のコミュニケーションを良好にする職場環境やシステムを構築することが、入所高齢者の尊厳を守り、個別性の高い高齢者の特性のより良い理解と満足度につながる可能性が示唆された。

（論文審査の結果の要旨）

高齢者施設のケア提供者 30 名を対象とした半構造化面接を用いた質的研究により、高齢者のケア目標には「日々のケア目標」（セルフケア、生活環境と嗜好、身体面、精神面の 4 カテゴリ）と「長期ケア目標」（その人らしい生活、在宅復帰、終末期の看取りの 3 カテゴリ）、さらにケア目標に関連する要因には 4 テーマが抽出された。

上記に基づき 4 領域 25 項目（基本的 ADL[日常生活活動]7 項目、手段的 ADL5 項目、生活環境と生活スタイル 8 項目、情緒 5 項目）のニーズに関する質問紙を作成した。入所高齢者 120 名から回答を得て因子的妥当性（χ^2/df=1.090、RMSEA=0.03、パス係数：0.28-0.87）、内的整合性（α係数：0.79-0.85）、18 名を対象に再現性（κ_w係数：14/25 項目で 0.60 以上）を検証した。

入所高齢者と介護職員 115 ペアの解析から、高齢者のニーズ（括弧内：中央値）は、手段的 ADL (66%)と生活環境と生活スタイル(69%)が、基本的 ADL (83%)と情緒(91%)に比べて低いこと、介護職員による高齢者のニーズ把握は、手段的 ADL (55%) と生活環境と生活スタイル(60%) が基本的 ADL (87%)と情緒(87%) よりも低く、特に家事活動(30%)と金銭管理(43%)、役割活動 (41%)のニーズ把握が低いことが示された。

これらの結果から高齢者ケアの質向上のために、ケア提供者による高齢者の主観的ニーズ把握のギャップを認識し、その理解を深める必要性が示唆された。

以上の研究は、高齢者入所施設におけるケア提供者と入所者本人の視点の解明に貢献し、高齢者の尊厳とケアの質向上に寄与するところが多い。

したがって、本論文は博士（　社会健康医学　）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成 28 年 4 月 28 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日　以降